辺境のディケンズ
――公開朗読を待つシラキュース・ロチェスター・バッファロー――

川　澄　英　男

ディケンズは1867年11月から1868年4月にかけてアメリカへの第二次訪問を試み、その間、合計で76回にわたる公開朗読を行っている。ボストンで18回、ニューヨークで26回、フィラデルフィア、ボルティモア、ワシントンD.C.などの東部海岸都市で16回、ハートフォードなどのニューイングランド地方の諸都市で9回、そしてニューヨーク州では州都のオールバニーで2回、さらにシラキュース、ロチェスター、バッファローと、当時の辺境に近いニューヨーク州西部の地方都市での5回の公開朗読である。本稿では、ボストン、ニューヨーク、東部海岸都市などの大都会から遠く離れた辺境の地方都市における、ディケンズの朗読とそれを迎えた人々の反応を分析し、地方都市における公開朗読の姿に迫りたい。

東部海岸都市での朗読を終えたディケンズはニューヨークに戻り、続いてニューイングランド地方のハートフォード（コネティカット州、2月18日）、プロヴィデンス（ロードアイランド州、2月20日、21日）で朗読を行い、さらに、2月24日、25日、27日、28日に再度ボストンでの朗読に臨んでいる。その間、2月24日には下院で第17代大統領アンドルー・ジョンソン（Andrew Johnson, 1808-75）の弾劾を決議する投票がなされたが、その動揺が大きかったため、3月2日以降、公表されてはいなかったものの予定されていた、同じボストンでの四回の朗読を断念せざるを得な

くなった。思いがけなく一週間の休暇を取ることができたディケンズは、十分休養した後、満を持して、3 月 6 日、新たな北西部への朗読の旅に出発したのであった。

しかしニューヨーク州とはいえ、その北西部は未だ発展の途上にあり、今では 15 万人近くの人口を抱えるシラキュースでさえも、ジョン・フォースター（John Forster, 1812-76）への手紙に、“On the previous night at Syracuse—a most out of the way and unintelligible-looking place with apparently no people in it.”[1] と語られるように、人けもない、うすぼんやりした町で、実に辺鄙な所だったようである。

友人のチャールズ・フェクター（Charles Fechter, 1822-79）への手紙にも “I am here in a most wonderful out-of-the-world place, which looks as if it had begun to be built yesterday, and were going to be imperfectly knocked together with a nail or two the day after tomorrow. . . . I have looked out of window for the people, and I can't find any people.”[2] と書き送り、「昨日建て始められたばかりの町で、あと二〜三本釘を打ってすぐ完成といったところに来てしまいました」と嘆いている。「外を見ても、人っ子一人いない野中の一軒家」に宿を取らされて閉口するディケンズの姿が目に浮かぶ。この手紙は 3 月 8 日の日曜日の夜に書かれているが、日曜日であったということも、町全体を閑散とさせていた原因なのかもしれない。当時の地方都市がどんな状況だったのかがわかる、興味深い「報告」になっている。

また、アメリカ人の友人 J. T. フィールズ（James T. Fields, 1817-81）には、宿泊した The Syracuse Hotel について、“Its' Hotel[The Syracuse Hotel] is likewise a dreary Institution. . . . The awaking to consciousness this morning. . . in a room holding nothing but sour dust, was more terrible than the being afraid to go to bed last night.”[3] と語り、手入れの行き届かない埃まみれの部屋に泊まらざるを得なかった “dreary” な体験が述べられているが、ことさらディケン

ズにはそう見えたのか、それで当たり前で、別に気にもとめない辺境の宿の主人の常識なのか、気になるところである。確かに田舎の地方都市では、都会の洗練された感覚が根づいていないのは当然のことであろう。

義妹のジョージーナ・ホガース（Georgina Hogarth, 1827-1917）にも、"This is a very grim place in a heavy thaw, and a most depressing. The Hotel also is surprisingly bad....The whole country being under water with melting snow, we stood it out for an hour and came in again, having to change completely."[4] と語り、泥でぬかるんだ町のホテルで、夕食には硬いバッファローの肉、朝食にも硬い豚肉を食べさせられ、果して今夜は一体何が出てくるのやらと、ディケンズは気をもんでいる。[5] ボストンやニューヨーク、ニューイングランド地方の都市から遠く離れた「西部」で最初に立ち寄った町だけに、その落差にディケンズも愕然としたのであろう、幾つもの便りの中で、同じような印象を綴っている。この後訪れるロチェスターも、シラキュースと同じ様な小都市であるが、もう「辺境」に慣れてしまったせいか、ことさら町の感想を述べた書簡は送ってはいない。

ではこのような辺境の地方都市で、ディケンズの朗読はどのように受け入れられたのであろうか。ニューイングランド地方の諸都市―ハートフォードやプロヴィデンス、そしてこの北西部への朗読の帰路、ボストンへ戻る途中寄ることになる、スプリングフィールドやウースターを始めとする都市では、早くから「ライシーアム」と呼ばれる文化講演会が行われてきているが、辺境のシラキュース、ロチェスター、バッファローは、いかなる反応を示すのだろうか。

3 月 9 日、シラキュースで "Carol" と "Trial" が朗読された。それを伝える *The Syracuse Courier* 紙は翌日、"About sixteen hundred admirers of the celebrated English Novelist, assembled at a literary banquet in Wieting Hall, last evening, and there feasted to their hearts' content on "Treacle," prepared by the hands of

the immortal Dickens himself. He “spooned” out the compound to the hungry ones present, who seemed to relish it with evidences of satisfaction. . .”[6] と、熱のこもった書き出しでビッグイベントを報じている。東部海岸都市ボルティモアの Concordia Opera House 会場の収容人員は 1200 人であったので、1600 人収容できるシラキュースの Wieting Hall はそれよりも規模が大きかったことがわかる。

シラキュースの人々にとっては稀に見る “literary banquet” であるが、ディケンズの朗読を聴ける喜びを “banquet” “feast” “content” “Treacle（糖蜜）” “spooned out” “hungry ones” “relish” などという、いわば御馳走に与れる喜び、しかもディケンズ自ら調理してくれた料理を満喫できる至福の時というイメージで伝えた報道は、今回、*The Syracuse Courier* 紙が初めてである。アメリカでの朗読を報じる各地、各紙の紙面において、こうしたスタイルが今まで一度もなかったことを考えると、この辺境の地が、いかにディケンズの「美味しい」エンターテインメントを待ち望んでいたかが、強く伝わってくる。

ディケンズの朗読については、声が隅々までよく徹り、言葉一つひとつもはっきり聞き分けられたとしながらも、朗読家としてはディケンズを凌ぐ者が何人もいることを指摘している。また、ディケンズの声は確かによく徹るが、“clearness of voice” はいま一歩であるとも付け加えている。しかし、情景を言葉で鋭く生きいきと描写するという点においては、ディケンズ自身が、想像力に富んだ、比類なき才能を有する小説家であってみれば、ディケンズに並ぶ朗読家は少ない、として、それを示す例として、Cratchit 家のクリスマス・ディナーのシーンを挙げている。

同紙は “actor” としてのディケンズも高く評価していて、とくに精霊と Scrooge が Fezziwig に出会うシーンと、Cratchit 家のディナーの最後に行われた「目隠し遊び」や「イエス・ノー・ゲーム」のシーンは秀逸である

と称賛している。そして論評の終わりに、他の都市での報道にはあまり見られなかったことであるが、ディケンズの風貌についても、紳士然とした顔だちで、体型はほっそりしていて、背は五フィート六インチ、目はブルーで、エレガントな着こなしの上着の襟のボタン穴には、小さなコサージが挿されている、など比較的詳しく叙述している。

シラキュースのもう一つの新聞 *The Syracuse Journal* 紙も、ディケンズの朗読について詳細に報じているが、同紙は会場となった Wieting Hall を "one of the grandest public halls of the interior cities"[7] として、シラキュースの誇る公会堂であることを強調することから始めている。聴衆は "magnificent audience" で "refined and appreciative" な多くの人々が、"the greatest living novelist" の朗読を聴きに集まったと、ディケンズを "the greatest" と最上級で歓迎し、それにふさわしい "refined" なシラキュースの人々が出迎えたと語っている。

だが一方で、聴衆の側には必ずしもそうでない状況があったことも率直に述べ、ディケンズの作品のよさがわからない人も、数は少ないものの居たことを認め、また、ただ作家を見たいという好奇心だけで来た人も居たであろうと述べている。こうしたことは当然どこにでもあることで、わざわざコメントする必要性はないにもかかわらず、*The Syracuse Journal* 紙は、律儀にこうした点について触れていて、公正さ、正確さを期そうとする，同紙の素朴な報道姿勢のようなものが感じられる。

また、イタリアの女優で悲劇役者アデレード・リストーリ（Adelaide Ristori, 1822-1906）が同じホールで演じた時以上の "refinement, fashion and beauty" で会場は包まれたと、ディケンズの朗読が文字通り、これまででシラキュースにおける最大のイベントであったことを伝えている。会場へも聴衆は遅れずに到着し、整然と速やかに着席したと語っているが、大都市でしばしば見られる、入場前の大騒ぎはなかったことが特記されてい

る。

朗読の始まりについては、時間通りに現れたディケンズが演壇に立つと、果して拍手していいものかどうか迷ったような “suppressed applause” が 30 秒ほど続いた後、朗読が始められたと報じている。場馴れしない、実直な地方都市シラキュースの当時の面影が、そこはかとなく伝わってくる。同紙はまた、完璧なステージ効果を演出するように工夫された演壇、照明のガス燈、バックスクリーンが、朗読するディケンズを効果的に浮かび上がらせていたとして、ディケンズの服装から指に光るダイアの指輪に至るまで、詳細に描写している。朗読におけるディケンズの顔の表情と声の変化については、実に豊かで、朗読を聴くことによって、ディケンズの創造した世界をより良く理解することができたと、感想を述べている。

プログラムは “Carol” と “Trial” であったが、他の大都市で、その他の朗読を含めて、いわばフルコースで聴いた人々の推薦の「出し物」も、正にこの二つであると紹介し、一回しか朗読する機会がないとすれば、これ以上のものはないとして、シラキュースで一度しか朗読が行われないことを極めて残念に思う気持ちを滲ませている。しかし一方で、この二つの朗読にこそ、ディケンズを “the most popular novelist of the century” にしたキイを見て取ることができるのであって、そうした朗読が聴ければ、それで十分であるとも強調している。

二つの朗読のうち、とりわけ同紙が高く評価するのは “Carol” の方で、“‘The Christmas Carol’ touches the finer feelings, vivifies the common humanity and makes people better and worthier.”[8] と語っていて、人々のモラルに訴える点に朗読もしくは作品の真価を認めているが、大都会コスモポリタンの各紙とは一味違うスタンスが見てとれる。というのも、ボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアなどでは、“Trial” のコミカルな朗読を最も良いとするコメントを載せる新聞が目立ったからである。しかし同 *The Syracuse*

Journal 紙は、“Trial” を認めつつも、“It affords, however, but a single revelation of the author's power, and that not his best, certainly not his strongest.” とモラルを内包しない朗読の「弱さ」をはっきりと指摘している。“Carol” は、ウィットとユーモアというぴったりのセッティングの中に散りばめられたペーソスとセンチメントを、聴衆に余すところなく伝えてくれると、大きな評価を与えている。

同紙はまた、ディケンズの顔の表情の持つ力と、各キャラクターの発する声の多様性について触れ、ディケンズの優れたパフォーマンスを通して、聴衆は作者による作品の解釈を改めて知らされる貴重な体験をしたと、朗読の意義を強調し、“The power of the writer has been intensified by his presence and acting.” と述べている。

さらに同紙は、25 年前のディケンズの第一次アメリカ訪問に言及し、アメリカ訪問の後に発表された *American Notes* の中でディケンズの示したアメリカに対する批判的な見解は、決して忘れられるものではないとしながらも、こうした偉大な作品を幾つも創造した作者を間近に見ることで、より一層の親近感を抱き、以前にも増して好意を持ったことは確かであるとして、ディケンズのシラキュース訪問と、そこで行われた、ただ一回の朗読の意義を述べることで論評を終えている。

しかしこの批評も極めてユニークである。というのも、朗読を報道した多くの都市の各紙とも、25 年前ディケンズがアメリカ国民を批判もしくは侮辱したという事実を、朗読と絡めてコメントしてはいないからである。小さな「田舎」の都市であってみれば、どちらかといえば、静かな孤立した社会という一面も強いであろうし、コスモポリタンな都会のように、多くの意見が行き交い、価値観が錯綜する変化に満ちた社会とは言えまい。したがって、25 年前、地方の小さなコミュニティーにディケンズの与えたインパクトはいかにも深刻で、そのまま忘れ得ぬトローマとなっ

て残ったものと思われる。こうしたコメントを載せざるを得なかった事情である。

勿論のこと同紙の "His conduct twenty years ago, and his conduct while our country was in the extremity of a terrible civil strife, are also offences that are not, and will not be condoned on this side of the Atlantic."[9] との強い口調は、建国、都市の建設、フロンティアの拡大という辛く厳しい日々を生きる、そしてシラキュースのように今も生きている、辺境の小都市の住民にとっては、ディケンズの言葉が大きなショックであったことを示している。ただここで、そうした 25 年前の事実を語ることができるということは、ディケンズの朗読が、そうした傷を癒してくれ、ディケンズへの親しみと好意を持たせてくれたと認めるからであろう。紙面は、過去は過去として、今あるディケンズを受け入れることのできるシラキュースを表している。25 年前のシラキュースの反ディケンズの感情が大きかっただけに、いまそれを癒すディケンズの朗読が、それだけ偉大なものであったことが、逆に証明されたようでもある。

さらにシラキュースのもう一つの新聞 *The Syracuse Daily Standard* 紙もかなり長い記事を載せていて、冒頭ディケンズに対してシラキュース市民のもつ "joy and respect" について触れ、続いてディケンズの "magic pen" が幸せな時をくれたことに感謝の意を表している。そしてディケンズを見たいとする好奇心は、たんなる好奇心ではなく、既に良く知っている友人、心優しい気持をもった友人に実際に会ってみたいという好奇心であるとして、有力な政治家や戦果をあげた将軍を見たいという好奇心とは違う、友人としてのディケンズへの親近感なのであると述べている。

また同紙に顕著な点は、シラキュースの誇りを高らかに表明している点である。前回のアメリカ訪問では、ディケンズの足はこの "Central New York" に向かうことはなかったが、それもそのはず、シラキュースは

Martin Chuzzlewit に描かれた、開拓の遅れた「エデン」さながらの地だったからである。しかし今やシラキュースの人々は、ディケンズを "flourishing city" に迎え入れ、大都会に出しても恥ずかしくない立派なホールで朗読を聴こうというのであると、シラキュースの発展ぶりを強調している。

そして出席した人々も "All that is best in the intellect and culture of our city was present."[10] と述べられ、一流の人々の集まりだったことが明らかにされている。しかもこの朗読会がいかに並外れたイベントであったかは、シラキュースを取り巻く近隣の都市（Auburn, Cortland, Homer, Fulton, Oswego, Utica, Rome, Ithaca）などからも、多くの人々が参集したことからも窺い知ることができようと語っている。聴衆の服装については、何人かの女性が盛装で現れた（"a number of ladies looking charming in full dress"）のを除けば、着飾った人々は少なかったと、率直に報じている。ボストン、ニューヨークなどと比べ、経済規模の違う地方都市であってみれば、服装一つとってみても、人々の意識や行動様式は、良きにつけ悪しきにつけ、大都会とは異なるものであったろうことは、大いに頷けるところである。

"Carol" の朗読は、最初の一行 "Marley was dead, to begin with." が、むしろ早口に、何の気負いも感じさせない口調で、さらりと語られたようである。そして朗読家としての技術面については、コクニーではないが、明白な英国訛りをもち、抑揚は、弁論術などではよくないとされる上昇調（rising inflection）を多用している。しかしこれは、英国訛りと相まって、ディケンズにあってはむしろ "pleasing and very effective" となっていると指摘している。

顔の表情については、普段の顔は "a thoroughly good face" であるとして、暗い夜道、人里遠く離れたところで出会っても、信頼のおける顔つきをし

ていると、実に巧みな表現で伝えている。朗読をしている時の顔も「愛さずにはいられない」もので、性格の良さが、口もとから、目の輝きから溢れ出ていると、賛美している。声は "flexible" で、瞬時に、「語り」と「台詞」を使い分けることができるが、"powerful voice" とは言い難い。そしてディケンズは巧みな "actor" であり、"reader" か "actor" かと問われれば、"actor" といった方がいいとコメントし、Scrooge, Bob Cratchit, Fezziwig, Tiny Tim などの出来栄えを称えている。

10 分間のインターミッションの後行われた "Trial" も、よく知られた内容であるにもかかわらず、ディケンズの新たな解釈を得て、新しい作品であるかのような新鮮な印象を聴く者に与えてくれたと語っている。ただ、他紙もしばしば主張するように、朗読だけに限っていえば、ジョージ・ヴァンデンホフ（George Vandenhoff, 1820-84）の方が優れているとの評価を下している。しかし一方で、ディケンズの朗読はより "genuine" なもので、それこそが称賛に値すると付け加えることを忘れてはいない—ディケンズは聴衆とともに笑い、笑いを抑えることなく、自然な朗読を試みている。最後に同紙は、朗読を終わったディケンズが去るのを惜しみながら、"He is gone, but we shall all remember him." という一行を付け加えて筆を置いている。[11]

シラキュースを後にしたディケンズは、3 月 10 日ロチェスターの Corinthian Hall で同じ "Carol" と "Trial" を朗読し、帰路再びロチェスターに立ち寄り、3 月 16 日には "Doctor Marigold" と "Bob Sawyer" を披露している。*The Rochester Daily Union and Advertiser* 紙は、第一回目の朗読について、3 月 11 日付けの紙面で、"Dickens' Reading" の見出しの下に記事を組んでいる。それによれば、会場となった Corinthian Hall には 800 人ほどの "large audience" が集まったことがわかるが、若干の空席もあったようで、

それを弁解するかのように、「ディケンズの声が弱く、ホールの後ろの座席に居てはよく聞こえない」という風評がなかったなら、満席になっていたであろうと述べている。[12] しかし比較的馴染みの薄い公開朗読という催物であったこと、入場料も二ドルという高価なものであったことなどを考えれば、その割には入場者の数は多かったと、わざわざコメントしている。ボストンやニューヨークなどの大都会では、ダフ屋が出て入場料が何倍にも跳ね上がったにもかかわらず、会場は連日満席であった状況と比較すると、その違いは歴然としていて、やはり地方都市の発展が未だにその途上にあった様子が窺える。

さらに興味深いコメントは、聴衆が二つに分かれていて、一方は実際にディケンズを読んだことのある人々で、その作者をぜひ見たいと願っている人たち、もう一方は、何であろうと高価な入場料を払う催物に出かけるのが "fashionable" だと考えている人々であると、指摘している点である。言うまでもなく、こうした人々はボストンにもニューヨークにも、多数存在したであろうが、ロチェスターの新聞は、ことさらそうした観察を記事として載せている。文化的に遅れた内陸部の都市にいる人々が、自らを戒めるかのようなコメントから、町の発展に汗を流す朴訥な人々の心のうちが読み取れる。

"Mr. Dickens is a very particular man."[13] と同紙は続けているが、舞台装置に関して、朗読の最高の効果を引き出すべく、寸分の狂いもなくアレンジしようとするディケンズのこだわりについて語られている。これは勿論ディケンズの朗読への執念と、常に限界まで努力を怠らないディケンズの生き方によるのだが、同紙は、そのために三人も四人もの人が雇われているし、こうした豪華な装置のことを考え併せれば、極めて "expensive" なものになっていると付け加えている。朗読が "expensive" になっているという指摘も、ここロチェスターで初めて目にするコメントである。確かに

町の建設と発展に「ドル」は欠かせないものである。ディケンズも 25 年前、「ドルと政治」の話しかしないアメリカ人を、*American Notes* の中で嘆いていたが、発展途上の辺境の人々が「ドル」に無関心でいられるわけがない。そうした事情がよく伝わってくる紙面である。朗読の評価に関しては、既に各所で取り上げられてきた "Carol" と "Trial" だったためであろうか、"Those only who hear them and see the author can fully appreciate the effect of Mr. Dickens."[14] とまとめていて、具体的な評価は下していない。

また同紙によると、何らかの手違いからか、同時に二つのホテル（Congress Hall と Osburn House）が予約されていたらしく、それを知ったディケンズは、そのどちらのホテルにも泊まらず、第三のホテル（Brackett House）に滞在したとのことであるが、ディケンズらしい解決策であったといえよう。同紙は最後に、次回の朗読（3 月 16 日）について触れ、まだ空席があることを告げているが、こうした事態も、ディケンズの朗読会としては極めて稀なことである。[15]

ほぼ一週間後に行われた 3 月 16 日の二回目の朗読に関しては、*The Rochester Daily Union and Advertiser* 紙もその内容にまで踏み込んで、詳細に報じている。3 月 17 日付けの同紙は、会場は満席で、ロチェスターがかつて経験したことのないような盛況ぶりで、補助椅子まで出されたと伝えている。前回の報道にあった、「見た者、聴いた者にしかディケンズの朗読の真価はわからない」とする記事に触発されたからなのか、これが、二度とない最後の朗読だったからなのか、あるいは「ディケンズ」が容易に町の話題をさらってしまったからなのか、判断し難いところだが、"a large community"（と同紙は語っている）ならではの、富と知性を代表する人々でホールは埋めつくされたと報じている。ともあれ、批評はディケンズの朗読の "the matchless art" を称え、これを機会にロチェスターはディケンズの話題に沸騰し、新しいディケンズ像がつくられ、ディケンズの作品の価

値がよりよく理解されるようになるだろうと、ロチェスターの興奮を語り、“The author will be surrounded with an additional halo of glory.”[16] と熱っぽく伝えている。

“Doctor Marigold” については、キャラクターが生きて登場したかの錯覚に陥るほどの出来栄えで、小説以上に、なお一層のペーソスが加わり、深く心の琴線に触れる朗読であったと述べている。この朗読を体験することで、ディケンズがただ単にユーモアに訴える作家であるのではなく、人間性をよりよく理解させてくれる、偉大な “public benefactor” であることがわかってくるとコメントしている。また、聴衆がディケンズに親しみを覚えたエピソードとして同紙は、ディケンズが足早にステージに上がりながら “familiarly” に一礼したマナーを取り上げ、つられてこちらもそのまま返礼したくなるほどであったとし、ディケンズに会った瞬間、心と心の垣根がいとも簡単に取り払われたような、不思議な一瞬を経験したと特記している。こうしたところにも、ディケンズの人気の秘密があったのである。

また、既に各紙が指摘しているように、ディケンズはほとんどテキストを見ない。したがって、やはり “reading” というより “recitation” といったほうが正しいが、その際、テキストにない “colloquial phrases” もアドリブとして取り入れ、朗読を生きいきしたものにしている。そうした工夫もあってか、次第に聴衆には、ディケンズが “Marigold” に見えてくると語られている。もう一つの朗読 “Bob Sawyer” に関しては、コミカルなシーンを存分に楽しんだ、とだけ簡単に述べている。そして再びディケンズを聴くチャンスはないだろうことを、実に残念に思うとして論評を終えている。[17]

さてロチェスターでの第一回目の朗読を終わらせた後であるが、ディケ

ンズは続いてバッファローへ向かい、そこで “Carol” と “Trial”、及び “Doctor Marigold” と “Bob Sawyer” を二夜連続で朗読している。会場となった St. James Hall は未だかつてない “fashionable, intelligent, and critical audience” で溢れたと、3 月 13 日付けの *The Buffalo Courier* 紙は報じている。そしてそれに加えて、“the best minds of the city, the representative men of commerce, of trade, of the pulpit and of the bar”[18] と述べ、女性についてもわざわざ “the leaders of the fashions, our most beautiful and our most intelligent ladies” と特記している。いずれの都市においても、聴衆についての一言がまず前置きとして語られているが、この *The Buffalo Courier* 紙の「前書」はかなり徹底している。

記事はまだ続き、「市を代表するとまで言わないまでも、高い見識を有した人々……ただ単に虚栄心、好奇心を満たそうとするだけの人々……などあらゆる人々が……」と、ディケンズを聴きに集まった人々のことを叙述するのに、コラムの 24 行を費やしている。しかも、「ディケンズ氏は、五分も経たないうちに聴衆が自分の朗読に共鳴して一体となったことを悟った」と語り、ディケンズほど鋭敏な人なら、聴衆の「質」を見る目に間違いはなく、またそうしたレベルの高い聴衆を前にするからこそ、ディケンズの朗読もますます冴え渡ってくるのであると、付け加える周到さである。ディケンズへの尊敬と敬意、そうした文化的イベントを十分に享受できるバッファロー市民の自信と誇りを表現せずにはいられなかったのである。

次に同紙は実に詳細に、舞台装置—テーブル、テーブルのカバー、後部のスクリーン、照明、特にガス燈のバーナー (gas jets) の配置とその効果などについて説明を加え、朗読者の姿やその表情がはっきりわかるようにすべての装置が作られていて、優れた効果を生み出しているとして、“The effect of the whole is warm, agreeable, eminently cheerful. . . and the very

atmosphere which envelopes the artist is congenial."[19] と記している。同紙の舞台装置に関する解説は 55 行にも及び、アメリカの新聞が伝えるものとしては最長の部類に属する。ディケンズはワシントン D.C. で、ガス燈のバーナーの不具合のため朗読を取り止めようとしたくらいであったことを考え併せると、[20] 完璧な朗読の実現のためには、舞台装置が極めて重要な条件になっていることが理解できる。

朗読そのものについては、"Carol" を "Marley was dead, to begin with." と語り始めた時のディケンズの声があまりに "music, power and flexibility" に欠けていたので、果して朗読はどうなるものかと思われたが、その心配は全く無用で、ディケンズの声はきわめて効果的で、朗読も "artistic" であることがすぐに証明されたとしている。"Carol" における Scrooge を始め、Tom Cratchit、Tiny Tim そして Fezziwig 夫妻に至まで、声による各キャラクターの個性化がしっかりとなされていることなどがそれを裏付けていると評価している。

また "Trial" における、眠そうな Justice Stareleigh が喉の奥の方からブツブツ喋るところは圧巻で、Serjeant Buzfuz、Skimpin、Mrs. Cluppins、Mr. Winkle、Weller 親子などのキャラクターの個性化も同様に巧みになされている。これは、顔の表情、体の動き、ジェスチャーなど、ディケンズの持つ全ての力が一斉に発揮されるからで、ディケンズの描写する個性あふれるキャラクターは、無理なく完璧な形で聴衆の前に立ち現れる。ディケンズはその時ディケンズであることを止め、またそのキャラクターの創造者であることも、その解釈者であることも忘れて、完全に登場人物になりきっている。ディケンズが単なる朗読家（elocutionist）ではなく、"consummate artist" である所以であると、大きな賛辞を送っている。最後に同紙は、聴衆はこのエンターテインメントを、人生の最も楽しかった一時として決して忘れることはないであろうと、記事を結んでいる。

翌 3 月 14 日付けの同 *The Buffalo Courier* 紙も、第二回の朗読について再度長い批評を載せている。先ず、二回目の朗読も前回同様、バッファローの一流の聴衆によって会場は占められ、マネージャーのドルビー（George Dolby, 1831-1900）を始めとする係の人々の案内で、聴衆は整然と席に着いたことが述べられ、再び足早にディケンズが位置に付き、朗読のタイトルを改めて告げると、心からの拍手で迎えられたと語られている。そして東部の新聞の中には、ディケンズは拍手に対して “indifferent” であると報じている紙面があることについて触れ、決してそうではないと反論し、聴衆の拍手こそ “artist" の成功のカギであり、素早い反応を示す聴衆と、さらにそれに応える朗読する芸術家とのダイナミズムこそ重要であると指摘している。無論、バッファローの高いレベルを有する聴衆を念頭に置いてのことである。同紙は “They gave thorough evidence of their nice appreciation of the good points in the Reading, and the most comfortable feeling prevailed between audience and artist. . . . They exhibited good taste and intelligence, and contributed their share towards making the Reading a success.”[21] とバッファローの聴衆を誇らしげに称えている。

ディケンズの朗読そのものについては、批判すべきところはなく、極めて満足のいくものであったので、ただそう言うだけで十分で、どこがいいのか、なぜいいのかを分析することに、さしたる関心はないとしている。そして、朗読を成功に導くのは、果して朗読がいいからなのか、あるいはテキストがいいからなのか、どちらかと簡単に決められるわけではないと指摘し、だだ、ディケンズの生み出したキャラクターは、実にディケンズが創造したものであり、キャラクターの行動の動機、キャラクターの特徴、キャラクターの強さも弱さも全て作者は知り尽くしているのであって、ディケンズの朗読は、そうした熟知したものを伝えてくれていると言えば、それで十分であろうと論じている。

そしてその上でさらに、ディケンズの魅力は朗読そのものにあるというよりはむしろ、朗読を通じて、ディケンズが人生をいかに解釈しているかを示してくれるところにあり、深い洞察をもたらしてくれるところにあると語っている。また、ディケンズの文学についてよく言われる、冗漫と誇張（“verbosity and exaggeration”）などという批判も、朗読をほんの一時間聴くだけで吹き飛んでしまい、実際にディケンズを前にした時、その文学から一字一句たりとも省くことはできないことがわかる、と強く弁護している。

“Doctor Marigold” の朗読については、詳細は語り得ないし、またその意味もないとして、始めから終わりまで、ユーモアとペーソスに溢れ、しばしば拍手と喝采で中断されたとだけ述べている。“Bob Sawyer" に関しては、Jack Hopkins のネックレスの話は、その間、会場は途切れることのないどよめきに包まれていたと伝えるに止めている。最後に同紙は、「会場からの温かい拍手をもって、この記憶に残る朗読は幕を下ろした」という言葉で筆を置いている。

The Buffalo Courier 紙以外の新聞では、*The Buffalo Daily Post* 紙も、3 月 13 日の紙面で “Charles Dickens!. . . His First Reading in Buffalo. . . . A Triumphant Success!” という見出しの下に、第一回目の朗読について報じている。それによると、ディケンズはニューヨーク州の西部ではかつて例を見ないほど多くの “intelligent” かつ “appreciative” な聴衆を前に朗読を行ったことが先ず記されている。そしてガス燈や朗読台を始めとするステージ効果についてコメントした後、“Carol” について語っている。同紙は “From first to last his reading of Christmas Carol was natural, effective and at times impressively descriptive, dramatic and beautiful.”[22] と伝えているが、ディケンズは聴衆の心を捉え、一つひとつの言葉が聴く人の胸に深く入り込んでいったと述べている。

続けて同紙は “Trial” について、どちらかと言えば、“Carol” より “Trial” の方が印象深かったとして、ディケンズのあふれんばかりの巧みなユーモアを称賛し、ディケンズの朗読家としての力量に疑問をもつ者がいれば、“Trial” を聴けばそれは消えてなくなると語っている。そしてディケンズ自身についても、その服装は隙のない趣味の良さを見せ、身のこなしは “a hightoned, unostentatious gentleman” であると称えている。最後にディケンズを、“Great Interpreter of Human Passions” と呼び、ディケンズは常に変わらぬそのままのディケンズであって、“simple, natural, but still grand and effective” なディケンズであるとコメントして終わっている。[23]

ところでバッファローでの朗読を終えたディケンズであるが、25 年前の訪問で大きな感動を覚えたナイアガラ瀑布を再び訪れている。「今朝バッファローからここへ来る時ほど興奮していたのは生まれて初めてのことでした」[24] と語ったのは 30 歳のディケンズである。第一次訪問の際、瀑布を前にした感動を “It would be hard for a man to stand nearer God than he does there. There was a bright rainbow at my feet; and from that I looked up to—great Heaven! to what a fall of bright green water! The broad, deep, mighty stream seems to die in the act of falling. . . . The first effect of this tremendous spectacle on me, was peace of mind—tranquillity—great thoughts of eternal rest and happiness. . .”[25] と叙述している。創造の奇蹟が天才の感性を経るとどうなるかが、歴然とした文章である。これは *American Notes* にも、推敲を加えて収められている。[26]

25 年の歳月を経た今、この奇蹟—「神の間近」に再び立ったディケンズは、「25 年前にここを見た時貴兄にお話したことが、すべてよみがえってきました」とフォースターに書き送り、“Nothing in Turner’s finest water-colour drawings. . . is so ethereal, so imaginative, so gorgeous in colour, as what I then beheld. I seemed to be lifted from the earth and to be looking into Heaven.”[27]

と変わらぬ感動を伝えている。ナイアガラ瀑布での二日間はディケンズにとって、昔も今も、永遠に変わらぬ “most brilliant days” であった。

バッファローを発ったディケンズは、帰路再びロチェスターに寄り朗読を行った（3 月 16 日）が、翌日オールバニーへ向かって出発したところ、雪解けで増水した川の氾濫で列車は立ち往生し、シラキュースを過ぎてユーティカ（Utica）にさしかかった辺りで下車せざるを得なくなっている。この洪水については、弁護士のフレデリック・ウーヴリー（Frederic Ouvry, 1814-81）に宛てたディケンズの手紙の中に詳しく記されていて、「辺り 300 マイルに渡って浸水していた」と述べられている。[28] 目に入るものは、水の上を漂っている納屋とか壊れた橋など残骸ばかりで、翌日、列車も洪水の中を遅々とした足取りで進み、やっと一日延期されたオールバニーでの朗読（3 月 17 日に予定されていたが翌日 18 日に行われた）に間に合わせたと、語られている。

こうした書簡からも察せられるように、都市の建設にあたっての排水設備などのインフラの整備は大事業で、地方の小都市ではそう簡単にいかず、発展も思うように進まなかったのは事実である。そうであってみればこそ、こうした辺境にまで来なくとも、ニューイングランド地方や東部海岸都市でいくらでも朗読はできたであろう。しかしディケンズは、敢えて十分とは言えない健康状態を押して西を目指した。文化的に遅れた地方都市にも自分の朗読を聴かせたい、楽しんでもらいたいと考えてのことかも知れないが、何故か、生涯もう二度と見ることはないであろうナイアガラ瀑布―かつての若きディケンズの目に焼きついて離れなかったあの奇蹟を、再び目にしたいと望んだからだったのではないだろうか。ディケンズの感動の深さは、既に引用した文章の示すままである。

無事オールバニーでの朗読を終えたディケンズは、その足でスプリングフィールドへ向かい、ボストンへの帰路、再びニューイングランド地方の

諸都市―ウースター、ニューヘイヴン、ハートフォード、ニューベドフォード、そしてメイン州のポートランドなどで朗読を続け、月末にはボストンへ入っている。そしてボストンでの「さよなら公演」を 4 月 1 日から 8 日まで六回にわたって行い、その後ニューヨークへ戻り、そこで 13 日から 17 日まで、四回の朗読からなる最終シリーズを行い、さらに、ホラス・グリーリー（Horace Greeley, 1811-72）の主催した “Press Dinner” を挟んで、4 月 20 日、アメリカでの最後の公開朗読が “Carol” と “Trial” で静かに締めくくられたのである。

こうしてアメリカでの公開朗読は大成功を収めたわけであるが、当時の各地の新聞を見ることによって、いわば「生」の形で、ディケンズの朗読の様子、朗読を聴く人々の反応と朗読への評価、そしてその時のアメリカの姿、などを知ることができた。朗読を巡って紙上に展開された分析と批評は、ディケンズおよびディケンズ文学を多角的に研究する上での一つの貴重な資料でもある。

その中で、特に目についた点は、多くの新聞が指摘していた通り、[29] 純粋な意味での朗読家（elocutionist）ということであれば、ディケンズを上回る人が何人もいるという事実である。登場人物の声を真似るという点に関しても、腹話術師（ventriloquist）の中には、ディケンズより巧みな者は数知れない。また俳優としてディケンズを捉えた場合、その才能を認めることはできるとしても、優れた演技でディケンズ文学の登場人物を演じて、ディケンズの朗読以上に人々の心を揺さぶる役者があまた居るのは確かである。しかしディケンズの朗読が他の追随を許さない比類なきものであるのは、全てのキャラクターがディケンズの深い洞察を通して、ディケンズによって創造されたものであり、ディケンズはそのキャラクターの全てを知り尽くしているからである。これはディケンズによって初めて可能

となる。こうした評価は、各地の新聞の論評にほぼ共通した見方であった。人々が朗読に感動するのも、小説を読むことで得られたイメージが、作者自身の朗読によって、作者自身の解釈を与えられ、新しく、聴く人々の胸に響くからである。

朗読の様子については、テキストを朗読するというよりはむしろ暗唱で、時としてテキストから離れてしまうほど自由になされていることが、どの紙面にも述べられていた。とくに秀逸なのは、ユーモアとペーソスに溢れた場面で、“Trial” “Carol” “Doctor Marigold” “Copperfield” などが高く評価されている。ディケンズの声については、決して “powerful” とはいえないが、よく徹る声であり、むしろ「語り」の部分に適しているように思われるが、一転、「台詞」の箇所に至ると “reading” は “acting” に変わり、顔の表情、目の動き、身振り手振りも加わって、ディケンズ朗読の真髄を見せてくれる。しかしこうしたものの全ての根底には、「何が語られるか」という最も重要な問題が横たわっているのであって、そこにはディケンズにしか直観され把握されなかった真実があり、それが語られるところに朗読成功の本当のキイがある。各紙とも、ディケンズ文学と朗読の成功が不可分にあることが強調されていた。

また各地の新聞が競ってディケンズを歓迎し、ディケンズを迎えるそれぞれの都市が、高名なディケンズの朗読を聴くに相応しい町であることを訴えていたのも、共通した特徴であった。各々の都市が少しずつニュアンスを変えて自己をアピールしている。ボストン、[30] ニューヨーク、[31] そしてフィラデルフィアを始めとする東部海岸の大都市、[32] 辺境の地方都市 [33] に至まで、自らの都市の個性・特殊性をそれぞれ表明しながら、異口同音に、集まった聴衆は第一級の、その都市を代表する “splendid” な聴衆であったと主張した。宿敵—歴史のボストンと富のニューヨークの、互いを意識した自己アピールは勿論のこと、フィラデルフィアの場合も、コスモ

ポリタンなニューヨーク、政治の中心ワシントン D.C. に対して、クエーカー教徒の伝統を受け継ぐ、由緒ある、誇り高い町であることなどが、長々と述べられた。

誇り高いといえば、内陸部の地方都市にもその傾向は、勝るとも劣らないものがあった。そうした地方の新聞は、ディケンズの朗読そのものを伝えることは勿論であるが、ややもするとその前置きとしての聴衆についてのコメントも長くなった。紙面は、ディケンズ文学をよく理解する "refined" な人々で会場はあふれ、町の名士が顔をそろえてディケンズを心から歓迎したと一斉に報道した。こうした論調は反対に、多くの著名人を何度となく迎えるワシントン D.C. の新聞が、事実を淡々と伝える歯切れのよい文体で朗読を報じているのと、対照的である。[34]

また総じて各紙は、ディケンズの朗読に好意的な論評を掲載し、歓迎の意を表したが、中にはニューヨークのように、敢えてディケンズの朗読への批判的な評価を載せたものもあった。[35] 大方ポジィティブな論調であった *The New York Times* 紙であるが、長期にわたって朗読が行われたため、そうした批判的評論をも掲載する時間的余裕があったことにもよろうが、様々な分析を披露し読者の判断を仰ぐのは当然のことでもある。多様な価値観の横溢する大都会ニューヨークらしいといえば、そうとも言えよう。また地方都市の *The Syracuse Journal* 紙も歓迎の意を表し、ディケンズの人となり、文学、そして朗読を高く評価し、稀に訪れる著名人を「ビッグイベント」として受け入たことを伝えているが、25 年前のディケンズの辛辣なアメリカ批判から受けたトローマが、今でも忘れられず残っている事実にも触れている。[36] これは異例なことで、*The New York Times* 紙などは、そうした事実に触れながらも、かつての反ディケンズの感情は、今ではすでに風化してしまっていると語っていたし、[37] *The Philadelphia Inquirer* 紙なども、25 年前のディケンズに言及はしているものの、政治的なコメント

は一切避け、四半世紀を経たディケンズの姿、表情についてのみ叙述し、ただ時の流れだけを伝えている。[38]

しかし再び、各紙とも例外なく、アメリカ国民が久しく親しんできた、19 世紀最大の小説家ディケンズを実際に見るチャンスに恵まれ、その朗読を聴くという「生涯忘れられない」感動のひと時を過ごしたと報じており、その様子は「生々しく」紙面に再現されている。ディケンズの朗読に対する評価、ディケンズの人間性とディケンズ文学への理解、そしてディケンズを迎えたアメリカ各地の人々の姿—そうしたものが 140 年以上も前の新聞を通して、「リアルタイム」にわれわれに届けられたのである。

ディケンズを古都ボストンで初めて聴いたアメリカ、ディケンズに熱狂したニューヨーク、ディケンズ旋風の席巻した東部海岸都市（フィラデルフィア、ボルティモア、ワシントン D.C.）、ディケンズを迎えた辺境の都市（シラキュース、ロチェスター、バッファロー）—いずれの公開朗読も大成功を収め、今、まさに静かにその幕を下ろそうしていた。そんな時ディケンズは最終朗読を行う前の 4 月 18 日に、*The New York Tribune* 紙のホラス・グリーリーの主催する、新聞・雑誌・出版関係者を中心とした "Press Dinner" に招待されている。グリーリーの他に、*The New York Times* 紙のヘンリー・レイモンド（Henry Raymond, 1820-69）、*Harper's Monthly* 誌のジョージ・カーティス（George Curtis, 1824-92）、*The North American Review* 誌のチャールズ・E・ノートン（Charles E. Norton, 1827-1908）、高速輪転機の発明者リチャード・ホウ（Richard Hoe, 1812-86）、出版業界からはチャールズ・スクリブナー（Charles Scribner, 1821-71）、ヘンリー・ホルト（Henry Holt, 1840-1926）など、ディケンズ、グリーリーも含め、204 名が出席した盛大なパーティーであった。

しかし五時に開宴の予定となっていた会場の Delmonico's レストランに

ディケンズが到着したのは六時頃で、グリーリーの腕に深くもたれかかって姿を現した。持病の右足の痛風がひどくなったためであったが、厳しい気候と、旅の疲れ、週四回行われた朗読などでインフルエンザにかかり、体調は一向に回復していなかったのである。事実ディケンズは途中で気分が悪くなり、再びグリーリーの腕にもたれながら中座せざるを得なくなっている。こうした健康状態の中、一度も朗読を中止することなく続け、遠くナイアガラまで旅をしたという事実は、信じがたいほどである。

席上ディケンズは、その一部が *American Notes* と *Martin Chuzzlewit* の最後のページに常に掲載されることになった、有名なスピーチを行っている。それは 25 年前のアメリカ訪問の際得た印象を綴った *American Notes* と、その体験を一部に取り入れた小説 *Martin Chuzzlewit* がアメリカに対して極めて批判的な内容をもち、この 25 年間大きな反ディケンズの感情を引き起してきており、ディケンズはそうした状況をなんとか修復したいと望んだからであった。特に当時、新聞を始めとする出版関係者を激しく非難していたディケンズは、今席上、まず、新聞・雑誌が品位を得て、格段の進歩と向上を果たしたと、出版関係者に敬意を表している。そしてさらに、アメリカの人々の生活に一段と優雅さと礼節が加わったことを称賛したディケンズは、自分自身の変化についても言及し、「25 年の歳月を経る中で、私自身に何の変化もなかったと思うほど傲慢ではありませんし、その間学ぶものはなく、最初に貴国を訪れたとき得た偏った印象の中で、正すべきものはないと考えるほど高慢でもありません」[39] と述べている。ディケンズのこうしたスピーチに、会場は「ブラボー」という声とともに喝采の渦に包まれた。公開朗読中も、何度となく自分の朗読について好意的に書かれた新聞を目にしていたディケンズである。自分がかつて批判した「新聞」「出版」関係者に招待された盛大なこのパーティーでの感慨は、ひとしおだったに違いない。

ディケンズの再訪は公開朗読が目的であった。休むことなく続けた朗読から莫大な利益を得たことは事実である。しかしまた、再び人々に歓迎され受け入れられることで、25 年間続いた反ディケンズの感情に終止符を打ちたいと願ったことも、紛れもない事実である。報道関係者を前にしたスピーチがそのことを如実に物語っている。そしてスピーチの終わりにかけてディケンズは、米・英両国民は本質的に一心同体であり、共に手を取り合って進まなくてはならないと宣言している。すると、こうした気持ちに応えるかのように、グリーリーの *The New York Tribune* 紙は、「ディケンズの再訪は……必要であった。全ての雲、全ての不信は払いのけられて、いまやディケンズの名はアメリカの賛美の的となり、翳りない銀色の光の中で輝いている」[40] と報じている。

ディケンズのアメリカでの公開朗読の目的は達せられた。莫大な利益と新たな名声、そして和解と心の安らぎ―ロシア号で日の傾きかけたニューヨーク港を東に航路をとったディケンズが、アメリカの人々、そして全ての人々に永遠の別れを告げたのは、そのほぼ二年後のことであった。

注

1 Charles Dickens, The Pilgrim Edition of *The Letters of Charles Dickens*, ed. Madeline House et al. (12 vol; Oxford: Clarendon Press, 1965-2002), XII, 74. 以後 *P L*, XII, 74. と略記する。

2 *P L*, XII, 67.
なお、25 年前、ニューイングランド地方の都市ウースター（マサチューセッツ州）を通過した際にも同じように、"There was the usual aspect of newness on every object, of course. All the buildings looked as if they had been built and painted that morning, and could be taken down on Monday with very little trouble." とその時の印象を *American Notes* に記しているが、25 年の歳月を経た今でも、国の

中心から遠く離れた地方都市の発展は極めて遅れていて、ディケンズの目には、25年前のウースターのように映ったのであろう。Charles Dickens, *American Notes* and *Pictures from Italy* (“The Oxford Illustrated Dickens”; London: Oxford University Press, 1974), p. 71. を参照に。なお、同書からの引用は、以後*A N*, 71. のように略記する。

3 *P L*, XII, 68.

4 *P L*, XII, 69-70.

5 しかし、ディケンズらの泊まったThe Syracuse Houseは、Onondaga Historical Association & Library所蔵の *Clippings Scrapbook* (p. 89.) の “Famous People in Syracuse” によれば、歴代の大統領（John Q. Adams, Martin Van Buren, Millard Fillmore）および、高名な政治家（Henry Clay, Daniel Webster, William H. Seward, Stephen A. Douglas, Winfield Scott）なども宿泊したことのある、由緒ある一流のホテルであったとされている。それだけに、ニューヨークやボストンと比べ、地方都市の発展の遅れを知ることができるといえる。（実際シラキュースが市となったのは、1847年のことである。）北西部へのディケンズの公開朗読は、そうした環境の中で行われたのであった。

6 *The Syracuse Courier*, March 10, 1868.

7 *The Syracuse Journal*, March 10, 1868.

8 *Ibid*.

9 *Ibid*.

10 *The Syracuse Daily Standard*, March 10, 1868.

11 シラキュースはディケンズが訪問してから101年経た1969年3月9日、“Syracusans recount Charles Dickens’ visit 101 years ago” (by Connie Schreiber) という特集記事を組んでいる。（*Clipping Scrapbook* “Famous people in Syracuse,” March 8, 1969.）その内容は、当時の新聞の記事をいくつか抜粋しながら、ディケンズの姿や、朗読の様子を再現したものだが、それに付け加える形で、いくつかの新たな情報を提供してくれている。

例えば、ディケンズの朗読への批判として、20分ももたずに出てきてしまった人の投書を紹介して、“I sat with Dr. Lyman Clary, listened to Dickens’ readings about 20 minutes, heard his poor voice and common place rendition, retired and gave my pass to Henry C. Leavenworth, who was at the box office, saying, ‘Take

this, save three dollars and sleep soundly, but don't disturb Dr. Clary by snoring.'" と引用している。

またサウスダコタ州デッドウッド（Deadwood）の住人で、William J. Thornby 大佐なる人物の、1911 年 6 月 15 日のシラキュースへの新聞の投書を取り上げ、ディケンズが宿泊した時ベルボーイであった Thornby 氏の、その時のディケンズについての思い出が "I guess he[Dickens] spent more than half an hour before a mirror, smoothing his hair and fussing with his beard." と述べられている。

さらに、ディケンズの The Syracuse House への不満を綴った手紙の内容が 10 年ほどして明らかになった時には、ディケンズの不当なコメントに対してシラキュースも苛立ちを隠すことなく、ホテルは何人もの大統領や上院議員も宿泊した立派なものであると、反論したことなどが載せられている。

12 フォースターへの手紙には、朗読の直前、ロチェスターがジェネシー川の氾濫におびやかされ、街路には小舟が用意されたほどであったことが語られている。しかも、会場が危険区域の真ん中にあって、以前の浸水では水かさが 10 フィート（3 メートル）にも及んだとのことで、こうした事実も聴衆の出足を鈍らせたと思われる。収益も、シラキュースで 375 ポンドあったのに対し、その時のロチェスターでは 200 ポンドほどであった。（*P L*, XII, 74. を参照に。）

13 *The Rochester Daily Union and Advertiser*, March 11, 1868.

14 *Ibid*.

15 3 月 11 日付けの *The Rochester Express* 紙は、"No man could be more gentle, kindly and human than he[Dickens] was last night. . . . The two hours were full of sunny happiness." と伝えている。（*P L*, XII, 74. を参照に。）

16 *The Rochester Daily Union and Advertiser*, March 17, 1868.

17 3 月 17 日付けの *The Rochester Express* 紙は "The character of Dr. Marigold was most perfectly portrayed, and the pathetic passages were inimitable. . . . His voice and manner give vitality and interest to passages which an ordinary reader of his stories would be apt to'skip' as tedious and tiresome." と語っている。（*P L*, XII, 74. を参照に。）

18 *The Buffalo Courier*, March 13, 1868.

19 *Ibid*.

20 *The Evening Star* 紙は 2 月 4 日の紙面で、"Mr. Dickens was exceedingly wrathful behind the scenes, at the bad light, and at first positively refused to give the reading in such a lugubrious shade." とディケンズの「怒り」について触れている。

21 *The Buffalo Courier*, March 14, 1868.

22 *The Buffalo Daily Post*, March 13, 1868.

23 *The Buffalo Express* 紙（3 月 13 日付け）の報道については、以下のように記されている。*The Buffalo Express*, 13 Mar., gave a very warm review of the first reading, particularly praising Mr Fezziwig's ball and, in The Trial , the "utter imbecility" of the Judge and the portrayal of the elder Mr Weller."No description could do justice to Mr. Dickens' powers as a facial artist." He frequently interpolated and varied the texts.（*P L*, XII, 74. を参照に。）

24 *P L*, III, 210.

25 *P L*, III, 210-11.

26 ディケンズの天才の片鱗を示す貴重な段落で、またフォースターなどの友人に書き送った書簡を利用して生み出された *American Notes* の創作過程を知る上でも有意義な一節である。以下が、推敲後の *American Notes* に見られる文章である。"Then, when I felt how near to my Creator I was standing, the first effect, and the enduring one—instant and lasting—of the tremendous spectacle, was Peace. Peace of Mind, tranquillity, calm recollections of the Dead, great thoughts of Eternal Rest and Happiness; nothing of gloom or terror. Niagara was at once stamped upon my heart, an Image of Beauty; to remain there, changeless and indelible, until its pulses cease to beat, for ever." (*A N*, 200.)

27 *P L*, XII, 75.

28 *P L*, XII, 83.

29 ディケンズの朗読を報じた以下の新聞各紙を参照に。

The Boston Morning Journal

The Boston Evening Transcript

The Boston Post

The Boston Herald

The Boston Daily Advertiser

The New York Times
The Philadelphia Inquirer
The Public Ledger (Philadelphia)
The Sun (Baltimore)
The Evening Star (Washington D.C.)
The Syracuse Courier
The Syracuse Journal
The Syracuse Daily Standard
The Rochester Daily Union and Advertiser
The Buffalo Courier
The Buffalo Daily Post

30 *The Boston Morning Journal*, December 3, 1867. などを参照に。

31 *The New York Times*, December 10, 1867.

32 *The Philadelphia Inquirer*, January 14, 1868.
The Sun, January 27, 1868.
The Evening Star, February 4, 1868. などを参照に。

33 *The Syracuse Courier*, March 10, 1868. などを参照に。

34 *The Evening Star*, February 4, 1868. 及び、*The Evening Star*, February 5, 1868.

35 *The New York Times*, December 16, 1868.

36 *The Syracuse Journal*, March 10, 1868.

37 *The New York Times*, December 16, 1868.

38 *The Philadelphia Inquirer*, January 14, 1868.

39 William G. Wilkins, *Charles Dickens in America* (New York: Haskell House Publishers Ltd., 1970), p. 264.

40 グリーリーの *The New York Tribune* 紙の 4 月 21 日付けの紙面は、以下のように伝えている。"Dickens's coming. . . was needful to disperse every cloud and every doubt, and to place his name undimmed in the silver sunshine of American admiration." Sidney P. Moss, *Charles Dickens' Quarrel with America* (Troy, N.Y.: The Whitston Publishing Company, 1984), p. 322.　を参照に。